

純粹経験の主客未分とは単なる経験の事実、フィクションを用いた思考実験で
検証する事柄ではない

～森岡正博著「人称の存在しない世界 「主客未分」再考」分析

2017年1月25日 宮国淳

<http://miya.aki.gs/mblog/>

本稿は、以下の論文、

森岡正博「人称の存在しない世界 「主客未分」再考」季刊『仏教』no. 8、1989年7月、
119～126 ページ

の分析により、純粹経験の主客未分とは何なのか明らかにするものである。

普通の経験も、特殊な経験も、すべてひっくるめて主客未分の経験なのです。(森
岡氏、126 ページ)

・・・という森岡氏の主張に関しては、まさにその通りだと言うしかない。字面だけを見
れば確かにそうなのではあるが、この結論に至る分析プロセスに根本的問題があるため、
純粹経験とは何かを見誤っているのである。本稿でその問題点について説明していく。

(※ 以下、森岡氏の当論文からの引用部分には「森岡氏」、西田幾多郎『善の研究』岩波
新書からの引用部分には「西田」と明記する。)

1. 西田の見解のブレを認めた上で分析すべき

森岡氏は次のように述べている。

西田幾多郎の言う主客未分の純粹経験は、普通の経験のことではなく、思慮分別を少
しも加えない「たとえば一生懸命に断崖を攀じる場合の如き、音楽家が熟練した曲を
奏する時の如き」経験のことを指すのでした（『善の研究』一六頁）。私たちの考え
方は、このような西田の考え方とは異なります。(森岡氏、126 ページ)

・・・純粹経験は普通の経験ではない、というのだ。しかし西田は、

純粹經驗説の立脚地より見れば、我々は純粹經驗の範囲外に出ることはできぬ。（西田、25 ページ）

とも述べている。これは単純な話である。私たちが経験していることそのもの＝純粹經驗なのであって、私たちにはその経験そのものしかない、これは考えてみればごくごく当然のことなのである。そもそもが純粹經驗に「特殊」も「普通」もないのである。さらに西田は『善の研究』第一編において、（それが上手くいかなかったにせよ）知覚も思惟も意志も知的直観もすべてが純粹經驗であることを説明しようとしている。

しかし、「一生懸命に断崖を攀じる場合の如き、音楽家が熟練した曲を奏する時の如き」経験という事例を用いて純粹経験を説明してしまうと、そのような状態でない場合は純粹経験でないことになってしまう。“我々は純粹経験の範囲外に出ることはできぬ”という西田自身の見解と矛盾してしまうのである。

つまり、純粹経験（＝直接経験）に関して西田の見解にブレがあることを認識しておく必要があるということなのだ。西田は明らかに主客未分の純粹経験と、訓練や精神集中によってもたらされる「無我の境地」「忘我の境地」とを混同している。訓練されていようがされていまいが、精神集中していようがしていなかろうが、純粹経験の事実としては主客未分であるのだ。

具体的に説明してみよう。精神集中していないということは、注意があちこちに移ってしまうことである。勉強しているのに、ついついテレビを見てしまったり、ラジオを聞いてしまったり、そういうことである。

このとき勘違いしてはならないのだが、あくまで注意は勉強、テレビ、ラジオ、というふうに向かっているということなのだ。そこに純粹経験の事実そのままとしての「自己意識」というものなどない。つまり精神集中していなくても、純粹経験の事実としては主客未分であるのだ。

野球が下手で自然に体が動かない場合においても、あくまで注意は何らかの視覚やら感覚やらそういったものに向けられているのであって、純粹経験の事実としては、やはりそこに「主観」というものなど見当たらないのである。

これは精神集中していても同じことである。精神集中しているということは、例えば他のことに気持ちを奪われることなく、勉強している、ただただ一つの対象に向かい続けている状態、あるいはただただ自然に体が動いている状態なのであって、主客未分であることにはかわりない。

つまり、西田の見解のブレは、純粹経験の主客未分と、「忘我の境地」「無我の境地」という全く別の論点の問題を混同して扱ってしまっているために生じているものなのである。それ故に、

世界を認識する「主観」と主観によって認識される「客観」がいまだ成立していないような状態、あるいは主観と客観の区別が崩壊してしまったような状態（森岡氏、119 ページ）

・・・この二つを同じに扱ってしまってはならないのである。純粹経験には主観・客観がそもそもない、それだけのことなのであって、それらが崩壊するのではない。

2. エポケーとは「要素」を取り除くことではない

次の問題は森岡氏のエポケーの手法が正当なものたりうるか、ということである。

私たちは、この世界から、他者をも私をも含めたすべての「人称」についてエポケーをします。従って、その作業の後には、人称的な意味をもついかなる「私」も残ることはありません。この点が、フッサールとは異なります。

この現実の人称的世界から、人称とそれに関わるすべての要素を取り除いた世界。そこには、私やあなたや彼などのいかなる人称も登場しません。また世界は、いかなる人称にも所属しません。（森岡氏、121 ページ）

・・・エポケーは「要素」を取り除くのではない。エポケーするのは私・あなたやその他の人たちが存在し、空間があつて時間があつて物があるという客観認識、主客の世界なのである。森岡氏の言うエポケーとは、主客の世界においてその一部の「要素」だけを取り除こうとするものなのだ。

私たちが実際に経験していないこと、つまり仮定や断定といった可疑的なものを排除し、実際に私たちが経験していること、明証性を持つ事実としての経験・体験は何なのか、厳密に検証していくこと、それこそがエポケーなのではないか。西田自身がそのことについて具体的に述べている。

物心の独立的存在ということが直覚的事実であるかの様に考えられて居るが、少しく反省して見ると直にその然らざることが明になる。今目前にある机とは何であるか、その色その形は目の感覚である、これに触れて抵抗を感ずるのは手の感覚である。物の形状、大小、位置、運動という如きことすら、我々が直覚する所の者は凡て物其者の客観的状态ではない。我らの意識を離れて物其者を直覚することはとうてい不可能である。自分の心其者について見ても右の通りである。我々の知るところは知情意の作用であつて、心其者ではない。（西田、65 ページ）

・・・「私」「私の心」そのものの経験はどこにもないのである。実際に経験しているのは、視覚、聴覚などの五感、あるいはその他の体感感覚やイメージやら浮かんできた言葉やらではなからうか。つまり純粹経験の事実として「私」というものがそもそもない、そういうことなのだ。

さらば疑うにも疑い様のない直接の知識とは何であるか。それはただ我々の直覚的経験の事実即ち意識現象についての知識あるのみである。現前の意識現象とこれを意識するということとは直に同一であって、その間に主観と客観とを分かちこともできない。事実と認識との間に一毫の間隙がない。(西田、66 ページ)

・・・つまり、あるのはただただ経験のみ、「私」が「意識」したり「認識」したのではない、あるのは経験の事実のみ、ということなのである。(※「意識現象」という表現には問題があるがここでは触れない)

3. フィクション構築における論理に根拠がない

森岡氏の見解には、論理とは何か、言葉とは何か、意味とは何かということに関する誤謬が背景にあるような気がしている。架空の設定において恣意的に世界を作り上げても、事実の説明にはつながらない。

「この現実の人称的世界から、人称とそれに関わるすべての要素を取り除いた世界(森岡氏、121 ページ)」とはいったい何なのか。「人称」という「言葉」だけがない世界なのか、「人称」とともに「私」がない世界なのか。フィクションといえども、その仮説が有意味であるためには、そのフィクションを説明する言葉に対応する何等かの対応物(イメージやら物やら)がなければならない。しかし森岡氏の「仮定」にはその対応物が不明確なのだ。その不明確な世界において「この世界から、人称とそれに関わる要素を除いた残りのものは、依然として成立し続けているからです。(森岡氏、121 ページ)」と断言できる根拠は何なのか。そこの論理を支える根拠がどこにも見当たらないのである。

現実世界(客観世界)における認識では、「私」がいなければ「経験」もありえない。つまり、**現実世界—「私」＝経験、とはならない**のである。これは足し算引き算の話ではないのだ。「人称とそれに関わるすべての要素を取り除いた世界」という「フィクション」において、この世界における“それ以外の要素”が全く同じである、となぜ言えるのか？

ここで大事なのは、**能動的な動作や意志が、人称の存在しない世界においてもあり得る**ということです。つまり、**能動的な動作や意志は、私や他者などの「人称」とは**

無関係だということです。そしてまた、人称の存在しない世界では、主観と客観の区別はないのですから、能動的な動作や意志は「主観」とも無関係であることになりま
す。「意志」は「私が——を意志する」という形をとらなくてもあり得るのです。（森
岡氏、122 ページ）

・・・恣意的に作り上げたフィクションにおいて、上記のような結論が出せる根拠とはい
ったい何なのであろうか？

身体世界、すなわち人称の存在しない世界とは、この現実の人称的世界から、人称
とそれに関わるすべてのものを取り除いた、フィクションの世界でした。そこは、自
他の人称が存在せず、かつ主観も客観も存在しない世界でした。

ここで、逆に、次のように考えることが可能です。すなわち、ここで明らかになっ
た身体世界に、人称とそれに関わるすべてのものを付加したものが、現実の人称的世
界なのです。（森岡氏、126 ページ）

・・・同様に、「人称のない身体世界」＋「人称」＝「現実世界」になる、という保証も
ない。

西田は思惟に関して下のように述べている。

思惟というのは心理学から見れば、表象間の関係を定めこれを統一する作用である。
その最も単一なる形は判断であって、即ち二つの表象の関係を定め、これを結合する
のである。しかし我々は判断において二つの独立なる表象を結合するのではなく、か
えって或る一つの全き表象を分析するのである。例えば「馬が走る」という判断は、
「走る馬」という一表象を分析して生ずるのである。それで、判断の背後にはいつで
も純粹経験の事実がある。判断において主客両表象の結合は、実にこれに由りてでき
るのである。勿論（もちろん）いつでも全き表象が先ず現れて、これより分析が始ま
るというのではない。先ず主語表現があつて、これより一定の方向において種々の聯
想（れんそう）を起し、選択の後その一に決定する場合もある。しかしこの場合でも、
いよいよこれを決定する時には、先ず主客両表象を含む全き表象が現れて来なければ
ならぬ。つまりこの表象が始から含蓄的に働いて居たのが、現実となる所において判
断を得るのである。かく判断の本（もと）には純粹経験がなければならぬというこ
とは、啻（ただ）に事実に対する判断の場合のみでなく、純理的判断という様な者にお
いても同様である。例えば幾何学の公理の如き者でも皆一種の直覚に基づいて居る。
たとい抽象的概念であっても、二つの者を比較し判断するにはその本において統一
的或る者の経験がなければならぬ。いわゆる思惟の必然性というのはこれより出でく
るのである。（西田幾多郎『善の研究』岩波文庫、28～29 ページ）

・・・思惟・思考・判断において、その正当性をもたらすものは純粋経験である、それが抽象的概念であったとしても、やはり純粋経験によって根拠づけられるものなのである（「統一的或る者」という表現は誤解を招きうるが）。

上記の西田の説明に反して、思惟が必ずしも表象を伴っているとは限らないことも事実である。算数・数学、あるいはその他些細な日常的判断など反復して経験している事柄においては、表象を伴わずとも勝手に答えが出てくるものである。しかし、そのような場合においても、その答えの正当性について検証しようとするれば、やはり純粋経験の事実へ立ち帰って確かめるしか他に方法がないのである。そして純粋経験の事実として現れないもの、想像すらできないもの、例えば「丸い三角」というようなものが「無意味」「ナンセンス」「矛盾」と呼ばれるのである。

例えば三角形の総べての角の和は二直角であることを証明するにも、或る特殊なる三角形の心像に由らねばならぬのである。思惟は心像を離れた独立の意識ではない、これに伴う一現象である。（西田、32 ページ）

・・・ということなのである。森岡氏の思考実験は、言語上の足し算引き算であって、その言葉に対応する経験がどこにも見当たらない、その論理の正当性を示す根拠がどこにもないのである。

4. 純粋経験は「世界」ではない

純粋経験は実際に私たちが経験していることそのもの、つまり「**事実**」である。実際に体験などしていない、「断定」「仮定」から導かれた「世界」のような「思慮分別」を除去していったものが純粋経験なのである。「世界」はエポケーされるものであって、その結果として見出せるものが純粋経験なのだ。純粋経験そのものが世界なのではなく、それを「世界」として把握した時点でそれは既に客観認識なのである。要するに**純粋経験を客観世界として理解・把握している**、ということなのだ。

そして「身体世界」という「仮定」も純粋経験とは全く別物なのである。経験は「身体」ではない。「身体」とはあくまで客観世界における概念である。「世界」が「一個」の「身体」になるというのは事後的に構築された客観世界的見解である。「私」の外側・内側の区別がないこと＝一個の身体ではない。これこそが一種の「仮説」・「思慮分別」なのであって、純粋経験として、私たちが実際に体験していることではないことは明白である。

5. 純粋経験の主客未分とは単なる経験の事実、フィクションを用いた思考実験で検証する事柄ではない

純粋経験の主客未分とは、西田の言うように「経験其儘」「事実其儘」、それはフィクションなどではない。フィクションを用いた思考実験で確かめるような類のものでもない。

私たちは、人称の存在しない世界を、ただ、「痛みがある」とか「腹が減った」とか「空が青い」とかの、非人称文によってのみ叙述が可能な世界として考えたいのです。すなわち、人称の存在しない世界では、空の青さを認識する主観としての「私」は存在しません。同時に、私によって認識される客観としての「空の青さ」も存在しません。ということは、主観たる「私」が、客観たる「空の青さ」を認識することも、その世界では起きません。ただ、「空が青い」と叙述できるようなある事態が成立しているだけなのです。（森岡氏、122 ページ）

人称の存在しない世界は、同時に、いわゆる主客未分の世界でもあることを意味します。（森岡氏、122 ページ）

・・・恣意的に現実世界から人称を取り除いてそれが主客未分だと説明されても、何の証明にもなっていないのである。人称文によって叙述が可能であっても、純粋経験の事実としては主客未分なのだ。

普通の経験も、特殊な経験も、すべてひっくり返して主客未分の経験なのです。（森岡氏、126 ページ）

・・・という森岡氏の説明は一見純粋経験について正確に説明しているようにも見える。しかし、客観認識のエポケーをせずに、主客の世界から形式的に「人称」という「要素」を取り除いただけの架空の世界における思考実験を経てもたらされた結論であるが故に、その内容が全く的外れなものとなってしまっているのだ。

繰り返すが、人称文によって叙述されるとかされないとか、そういう問題とは関係なく、純粋経験の事実としてはやはり主客未分なのである。

現実のこの世界では、「認識」はそもそも生じていない。現実のこの世界の解明は、認識論によってなされるのではなく、人称の行為の構造解明によってなされるのだ。（森岡氏、126 ページ）

・・・そもそもが「能動的な動作や意志」はあるのに「認識」はないという根拠はいった

いどこにあるのか？「私」がなければ「認識」がないのである。ならば「能動的な動作や意志」もないと考えるのが現実的なのではなからうか。なぜ「認識」だけ生じないと言えるのであろうか？森岡氏の論理構築は恣意的でその根拠が見当たらないのである。

<付録>因果関係とは～「共鳴」「共変」それこそが「因果関係」である

結論から言えば、森岡氏の言われる「共鳴」、大森氏の言われる「共変」それこそが、まさに「因果関係」なのである。因果関係とは、ある事象（経験）と事象（経験）との間に「関係」があると「認めた」、つまり主観的な印象にすぎないのである（このあたりはヒュームも言っていることだと思う）。つまり因果関係そのものの「根拠」を見つけようとしても見つかるはずがないのだ。「関係そのもの」というものは私たちの経験そのものとして現れてくることはない。ただ事象（経験）と事象（経験）との関係を「認めた」という事実のみがあるだけなのだ。森岡氏の言われる「共鳴」とは、まさに経験と経験との間の関係を「認めた」という「事実」のことであり、それがまさに「因果関係」なのである。

では、因果関係が確かなものであると捉えうるのはいかなる根拠によるものであろうか？それは、

- ・いつ見てもそうなる
- ・誰が見てもそうなる

・・・という経験の積み重ねにより、その因果関係がより確かなものであると考えられているのである。これは科学的客観性（あるいは再現性）そのものでもある。ある事象Aがあるとき、常に事象Bがある、という経験を積み重ねることによって、その因果関係がより確かなものであると認識されているのである。そして、それは新たな経験によって覆される可能性も有しているのである。

因果関係とはそれ以上でもそれ以下でもない。因果関係というものは、事象の繰り返しという「事実」によって初めてその客観性を獲得できるのであって、そうでない因果関係はあくまで「仮説」レベル、客観性を有さない因果関係の体系構築はあくまで「ストーリー」の域を出ないのである。

科学的客観性を保持できる因果関係把握など、私たちの生活の中でどれくらいあるだろうか？私たちの日常においては、主観的な因果関係の印象、確証のない推論的な因果関係把握をもとに行動の選択をしていることの方がむしろ多いのではないだろうか。

さらに言えば、経験として現れない「関係そのもの」を根拠づけようとして因果関係を

細分化していても、究極的な答えに至ることがない。なぜなら「関係そのもの」には経験の事実としての根拠がないのだから。

ただ確かなことは、既に述べたように因果関係の客観性とはあくまで「事実」（の繰り返し）によって支えられているものである。事実として見出せないものはあくまで「仮説」あるいは「ストーリー」であるに過ぎない。つまり因果関係で万物あるいはすべての事象が説明可能だとか決めつけることはできないのである。

因果関係とは、ただただある事象（経験）が生じればある事象（経験）が生じるという、特定の事象における関係を指摘したものであるにすぎない。それ以上でもそれ以下でもない。しかし、それは確かに事実によって支持されている。地球上において手に持っているリンゴを離せば確かに下に落ちるのである。そしてそこにパラドクスなど生じていないのである。

西田の説明は次のとおりである。

普通には因果律は直に現象の背後における固定せる物其者の存在を要求する様に考えて居るが、それは誤である。因果律の正当なる意義はヒュームのいった様に、或る現象の起るには必ずこれに先だつ一定の現象があるというまでであって、現象以上の物の存在を要求するのではない。（西田、75 ページ）

或る現象に或る現象が伴うというのが我々に直接与えられたる根本的事実であって、因果律の要求はかえってこの事実に基づいて起こったものである。（西田、76 ページ）

因果律というのは、我々の意識現象の変化を本として、これより起こった思惟の習慣であることは、この因果律によりて宇宙全体を説明しようとする、すぐに自家撞着に陥るのを以て見ても分る。（西田、76 ページ）

つまり「経験的事実→因果関係の把握」なのであって「因果関係→事実」なのではない。経験的事実によって支えられて初めて因果関係というものが把握されうるのである。もし経験的事実を因果関係によって説明することができないような事態が生じれば、別の論理が必要とされる、ただそれだけの話なのである。